

新しい歌を歌おう

奨励	三木 メイ [みき・めい]
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター助教
研究テーマ	キリスト教の実践神学（女性学、人間関係、牧会）

新しい歌を主に向かって歌え。
全地よ、主に向かって歌え。
主に向かって歌い、御名をたたえよ。
日から日へ、御救いの良い知らせを告げよ。
国々に主の栄光を語り伝えよ
諸国の民にその驚くべき御業を。

大いなる主、大いに賛美される主
神々を超えて、最も畏るべき方。
諸国の民の神々はすべてむなし。
主は天を造られ
御前には栄光と輝きがあり
聖所には力と光輝がある。

(詩編 96編1―6節)

マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのであれば、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。

(ヨハネによる福音書 20章11―18節)

京田辺校地にチャペルを

今年度最初の京田辺水曜チャペル・アワーを、献堂（竣工）したばかりのこの言館（KOTOBA-KAN）で行えることを、私はとても嬉しく思っています。京田辺校地は1986年に開校されましたから、今年で29年目を迎えます。同志社女子大学のキャンパス内にある新島記念講堂は、京田辺にある三つの同志社の学校の共同のチャペルとして建てられたのですが、大学がそこを使用するのは同志社京田辺クリスマス燭火讃美礼拝の時だけで、大学の通常のチャペル・アワーは教室を改装した場所や、「青空チャペル」と称して戸外で行ったりしてきました。

ですから、大学専用のチャペルが建てられるようにという願いは、当初から多くの関係者ももっていたようです。キリスト教文化センターの既存棟が建てられた頃は、将来隣の敷地（現在の夢告館の土地）にチャペルを建てるという計画があった、と聞いていました。でも、ご存知のとおりそこには文化情報学部のための建物が建設されました。その後も、京田辺校地での宗教施設建設のために学内での委員会が何度か設置されて、具体的な計画案が協議されたのですが、なかなか実現には至りませんでした。財政的な問題などがあったからかもしれませんが、私は自分の在職中には建たないかもしれないと密かに憂慮していました。しかし、京田辺校地にチャペルをという願いと祈りが、実現困難な状況のなかにおいても引き継がれてきたからこそ、この京田辺会堂は今日ようやく私たちの前に与えられることになったと思っていますので、喜びもひとしお大きいのです。

今日の詩編96編は、「新しい歌を主に向かって歌え」という言葉で始まっています。神への賛美の歌を新たに歌おう、という意味です。この詩編は実際に歌われていたようです。この歌を歌っていた人々は、さまざまな困難な問題や状況を抱えていたはずなのです。その困難や苦しみを乗り越えられるように、神の導きと守りを祈り求めながら、日々新たに、前を向いて、希望をもって、いつか実現する神の救いを待ち望みながら歩んでいこう、そういう想いが込められた歌です。これは約3000年近く前に作られた歌なのですが、今年ようやく京田辺会堂の献堂を迎えた私たちの現在の想いと重なる部分があるように、私は感じています。

主の復活（イースター）

そして、今年のキリスト教会の暦では、4月5日（日）が、主イエス・キリストの復活を記念して礼拝する「復活日（イースター）」でした。この会堂ができて上った時期に、ちょうどイースターを迎えるというのも、また喜ばしいと感じています。

イースターはクリスマスと異なり、固定祝日ではなく移動祝日なので、年によって日が変わります。教会暦では、春分の日以後の満月の後の最初の日曜日を「復活日（イースター）」の祝日とする、と定められています。皆さん「クリスマス」は知っているけれど、「イースター」はあまり聞いたことがない、という方も多いかもしれません。しかし、キリスト教会では、クリスマスの祝日より何百年も前から大切に守られてきた祝日です。

キリストの復活については、新約聖書の四つの福音書にそれぞれ復活物語として、少しずつ異なる記事が書かれています。今日読んだヨハネによる福音書の箇所では、マグダラのマリアが復活したキリストと直接言葉を交わした場面が描かれています。イエスは十字架上で死刑となって殺されました。それまでずっとイエスに従ってきたマグダラのマリアたちは、遠くからじっとイエスの苦しみと死を見つめているしかなかったのです。そして、イエスの遺体が墓に納められるのを見届けていました。救い主、メシアと信じていた人の死刑執行。弟子たちのなかには、結局あの人は救い主でもメシアでもなかったのだ、と絶望してどこかへ行ってしまった者もあったと思われます。しかし、マグダラのマリアをはじめ女性の弟子たちは、イエスのために最後になすべき業として、遺体に香油を塗りに墓にでかけました。そこには死んでもなお、イエスを愛し敬い続けていた彼女たちの想いがあります。その死を真実に追悼する心、悼む想いがありました。その絶望的な真っ暗な心の中に、明るい光が差し込んでくるように、彼女の前に現れた復活のキリストが描かれています。イエスは、「マリア」と呼びかけて、「わたしにすがりつくのはよしなさい、これから天の父なる神のもとへ上がっていく、そのことを他の弟子たちに知らせなさい」と、これから為すべき働きについて告げるのです。このマリアが伝えた復活信仰がキリスト教信仰の基盤となって、語り継がれていきます。この不思議な出来事については、いろいろな人がいろいろな捉え方をしてきたのですが、一度死んだ肉体が蘇生したかどうかが重要なのではなく、イエスの肉体が目に見える形では失われても、イエスはいつも弟子たちと共にあって、守り、導き、これからどういう働きをして生きていけばいいか、何を大切にして生きていけばいいかを教えてくれる存在となった、そういう意味で真実の救い主＝キリストなのだ、という新たな信仰が生まれた瞬間の出来事だ、と言えると思います。そして、それがイエスを直接知らない人々にも広がっていき、キリストの心を自分の心に重ねて、神と人とを愛して生きていく、キリスト教信仰が世界に広がっていったのです。

特に聖書やキリスト教を学び始めて間もない方々に、お伝えしておきます。人生のなかで絶望的な出来事や苦しみや困難に出会ったとしても、決して絶望のなかであきらめてはいけない、いつか明るい希望を見いだせる時がくると信じていこう、というメッセージが聖書のあちこちにさまざまな形でちりばめられています。旧約聖書の中にも、新約聖書の中にも、詩編の詩の中にも、物語の中にも、人間の絶望的な苦しみや嘆きが書かれていて、でもそれと同時に神の救いの希望も書き記されています。絶望から希望が生まれ、苦しみから喜びが生まれる。死から新しい生が生まれる。それを信じるのがキリスト教信仰なのです。

新島襄の海

同志社の創立者・新島襄も、青年時代には自分の置かれた状況、つまり鎖国という閉塞的な日本の社会に息苦しさを感じ、未来に希望をもてない時期があったようです。しかし、そんな中でも彼は、長崎から伝えられてきた蘭学や、外国の航海術や、漢文に訳された外国の書物を一生懸命読んで、自分の知らない世界に触れることで、大きな希望と夢を抱いたのです。なかでも彼が興味をもって積極的に学んだのが航海術、すなわち船を航海させる方法、そしてキリスト教に関する文書やロビンソン・クルーソーの冒険物語などです。新島が21歳で鎖国時代の日本から脱出したのは皆さんご存知だと思います。彼は若い時のさまざまな学びの中から、海を渡って見知らぬ世界でいろいろな思想や文化、科学、技術を学びたい、という希望を膨らませていたのです。そしてその可能性を必死になって、自ら探し求めて奔走したのです。新島襄が自分の青年時代について書いたものが『現代語で読む新島襄』（現代語で読む新島襄編集委員会編 丸善2000年）で読みやすい文章になっていますので、どうぞ皆さんも自分で手にとって読んでみてください。その一部をご紹介します。

「私はそれらの書物を夢中になって読んだ。疑う気持ちが起きた反面、畏敬の念に打たれもした。以前に勉強したオランダ語の本を通して、『創造主』という名称は知っていた（中略）私は、私たちが住んでいるこの世界が神の見えざるみ手により創造されたのであって、単なる偶然によるものでないことを知った」（17頁）。

これが、彼がキリスト教の神を知った時の想いだったようです。

そして外国に渡ることを決意した場面についてはこう記しています。

「一つの考えが稲妻のように私にひらめいた。箱館に行くこの機会を逃してはならない。そこから外国への脱出を試みるのだ、というものだった。そうすると、問題はどうやってこの機会を利用するかであった」（18頁）。

新島がどうしても外国へ行ってみたいと考えたのは、単に物珍しいものを見たいとか、自分が出世するためではありませんでした。彼が函館に着いてから考えたことが、こう記されています。

「家から遠く離れてみると、私は今までより注意深く観察するようになった。私が一番衝撃を受けたのは、人々の墮落した状態だった。その時私は、彼らの道徳がそのような嘆かわしい状態にある限り、単なる物質的な進歩はそれ自体が無益であるのを示すだけだ、と思った。日本が必要としているのは、単なる物質的な進歩よりも道徳的な改革なのである。こうして外国に行くという私の目的はいっそう強まった」（20頁）。

そうして、21歳で函館からベルリン号に乗船させてもらって、日本を脱出していったのです。その志を象徴するのが、この会堂の「新島襄の海」です。苦しみ悩み抜いて、自分の道を見いだしていった新島のことを心に覚えておいてください。

新しい一日を生きる

新入生の皆さんも、在学生の皆さんも、新しい年度の新しい学びの日々が始まりました。恵まれた環境ではありますが、皆さんにはそれぞれ自分が抱えている、悩みや不安や困難もあるでしょう。または、今はなくても将来困難な出来事や状況に出会うことは、いつか必ずあるでしょう。でも、一時がっかりするのは仕方ないけれど、決して絶望しないで、乗り越えていく力と知恵とを学生時代のうちにしっかりと養ってください。大学時代の今のうちに、自分が何を志していくのか、何を大切に考えて、どういう道を歩むのか、自分の志はどこにあるか、しっかりと自分自身と世界とを見つめて、希望の光を見いだしてください。

新しい一日一日を与えられていることに感謝して、一歩ずつ歩んでいきましょう。その道を主イエスが共に歩んでくださり、絶望を希望に、苦しみを喜びに、闇から光へと変えてくださることを信じて、共に歩んでいきましょう。

2015年4月8日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録